

# 博士学位論文審査要旨

2012年2月16日

論文題目： 石橋湛山の政治思想—思考方法から読み解く—

学位申請者： 望月 詩史

審査委員：

主査： 法学研究科 教授 出原 政雄

副査： 同志社大学 名誉教授 西田 毅

副査： 法学研究科 教授 富沢 克

要 旨：

石橋湛山研究を振り返ってみると、第一に湛山が戦前・戦中・戦後と長い期間にわたって言論活動を展開したこと、第二に戦前には『東洋経済新報』を舞台に「急進的自由主義」のジャーナリストとして活躍するが、戦後には保守政党の政治家に転身したことなどを見すえた上で、納得のゆく合理的な解釈がどこまで可能かという点にその研究上の難しさが存在する。本論文はかかる問題に果敢に切り込み、これまでの湛山研究に重要な問題提起を試みた意欲的な論文であるといえる。

本論文の第一の特徴は、これまでの湛山研究を大胆に批判している点にある。湛山は第一次大戦後の一時期の言説を中心に基本的に「急進的自由主義」＝「小日本主義」者としてみなされることが多く、一方でこの立場が戦時中に大きく転換したから保守的な政治家に転身したと捉えられるか、他方で「小日本主義」をもっぱら経済合理主義に引きつけて一貫していたと評価されるか、いずれにしてもこれまでの湛山研究は「小日本主義」者としての湛山像という理想化されたイメージが作り上げられていることに疑問を投げかけ、しかも後者のようにもっぱら経済合理主義に基づくエコノミストと見る視点からは湛山の政治思想は十分探求できないと批評される。

第二の特徴は、本論文が湛山の政治思想に着目した場合、彼の思考方法から読み解くというユニークな分析視角を提示している点にある。その際本論文の基礎をなす第一章「思考方法」にみられるように、思考方法の多様性に注目している点が注目される。湛山の思考方法の中心には、日本人の生活の方法にとって有効性を持つかどうかを基準にしたいわゆる「真」を追求する思考がおかれ、何よりも日本人の生活を重視する視点が強調される。しかもその思考が与えられた境遇の中で進められることから、おのずと「真」の内容は時代とともに変化せざるを得ない。そして、湛山の思考方法には一方で経済合理主義を導き出す合理的思考が存在するとともに、他方で非合理的な思考がここでは「日本」的視角に根ざした思考と捉えられ、具体的にはナショナルな心情や愛国心、あるいは「国民的使命感」や「道徳的使命感」などを意味し、前者はこれまでも検討対象にされてきたが、後者の非合理的な思考に関してはほとんど注目されることはなかったとされる。本論文ではこうした多様な思考方法から湛山の文化論（第二章）について、そして「天皇制」論（第三章）と対外論（第四・五章）においては戦後の言論活動を含め詳しい検討が試みられたが、その中でもとくにナショナルな心情が生活空間としての「根拠地」に基づくことによってその独善性が相対化されること、あるいは対外的には国民間の信頼関係の醸成という道義的観点の重視など興味深い指摘が数多く見出され得る。

第三の特徴は、湛山のリベラリストとしての実像はこれまで理解されてきた「急進的自由主義」にあるのではなく、「漸進的」性格にあると捉える。またこの「漸進」的性格は、生活の方法に

とっての有効性を重視する「真」を追求する思考から必然的に導出されるだけでなく、湛山がプラグマティズム哲学を受容する際その背景をなしていた進化論の影響を基礎にしていたというこれまであまり注目されてこなかった事実が明らかにされる。要するに、本論文は湛山の政治思想を、近代日本におけるいわゆる「保守リベラル」の思想史的可能性において捉え直そうとする点にその大きな特徴があるといえよう。

以上から明らかなように、本論文は主として湛山の政治思想を彼の思考方法から読み解くという興味深い分析視角から湛山のリベラリストとしての実像に迫った点で、これまでのやや理想化された湛山研究に対して一石を投じるものになっていると評価できる。

よって、本論文は博士（政治学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2012年2月16日

論文題目： 石橋湛山の政治思想—思考方法から読み解く—

学位申請者： 望月 詩史

審査委員：

主査： 法学研究科 教授 出原 政雄

副査： 同志社大学 名誉教授 西田 毅

副査： 法学研究科 教授 富沢 克

要 旨：

2012年2月1日の10時30分から1時間半ほどの時間をとって、口頭審査を行なった。時間いっぱい使ってかなり突っ込んだ議論を行なうことができた。審査委員から時にはかなり厳しい質問や意見が出されたが、申請者は終始真摯に、ほとんどよどみなく応答していた。むろんすべての問題に答えつくせたわけではなく、今後の課題として残された点もあるが、おおむね妥当な応答であると判断でき、論文テーマに関する理解は十分なものと認められる。将来の研究課題も多く出され、かなり充実した議論ができた。

語学については、本論文に引用されている英語文献を見ると、十分な英語の語学能力を有していると判断できた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

## 博士学位論文要旨

論文題目： 石橋湛山の政治思想—思考方法から読み解く—  
氏名： 望月 詩史

### 要 旨：

石橋湛山（1884—1973年）は、『東洋経済新報』を拠点に活躍した近代日本を代表する言論人であり、戦後は保守政治家として活躍した。湛山の思想的特徴は、その「多様性」にあった。そして彼の思想は、「小日本主義」として体系化されるとともに、「急進的自由主義」として評価されてきた。

しかし「小日本主義」概念は、研究者間で統一した理解が存在せず、またその本質が経済合理主義に代表される合理的思考に偏重して見出されてきたという問題もあった。確かに、「小日本主義」として湛山の思想が体系化されることで、彼の思想が近代日本思想史の中に位置付けられた意義は認められなければならない。ただ次第にそうした認識が持つ問題性も露呈された。その一つが、湛山の多様な思考方法に対する理解の仕方に関わる。先行研究では、思考方法について主に「欲望統整」哲学に注目してきた。これは湛山が物事を合理的に判断していたことを説明する点では、確かに説得力を持った。けれども実際には、合理的思考から導き出された言説だけではなく、ナショナリズムや愛国心あるいは「国民的使命観」、「道徳的使命観」といった非合理的思考から導き出された言説も少なくない。そして「欲望統整」哲学では、この非合理的思考を正確に捉えることも、またその思考方法を説明することも困難だった。さらに湛山の言説の多くは、合理的思考の観点から検討されてきたが、非合理的思考の存在を前提とした場合、前者から導き出された言説としてこれまで理解されてきたものが、実際には後者から導き出されていた可能性も十分に考えられる。

本研究は以上の問題意識の下、石橋湛山の思想を再検討する。その中でも政治思想に焦点を当てるが、本研究では《思考方法から政治思想を読み解く》という方法論を用いる。まず政治思想に注目するのは、それがこれまで等閑視されてきたこと、湛山の思想の本質を経済思想と規定することで政治思想と区分しようとする方法論に疑問を抱くからである。思考方法から読み解くというのは、彼の政治思想（延いては思想全般）がその基底をなす思考方法と深く関わっていたからであり、その思考方法と関連させて理解しなければ政治思想の本質を把握できないという理由に基づく。

第1章では、思考方法の再検討を行う。湛山の思考方法については、「欲望統整」哲学が着目されてきた。確かにそれは彼の思考方法の重要な柱であったものの、それと並んで見逃せないのが「真」を追求する思考であり、その構成要素の一つである「日本」的視角に根差した思考であった。前者は、日本人の「生活の方法」の有効性の有無に重点を置いた思考であり、「真」とは《日本人の「生活の方法」として有効性を持つもの》を意味していた。この思考と関連していたのが後者である。これには「国民的使命観」と「道徳的使命観」が深く結び付いており、それら使命観が《日本からの問い》《日本への問い》を生み出した。特に後者の《問い》は、自己内省の契機となっていた点で注目される。

第2章では、文化論について検討する。その特徴は、「創造」に重点が置かれていたことにある。しかしこのことは「模倣」を否定するのではなく、「自己目的化した模倣」への批判を意味していた。その理由は、「自己目的化した模倣」は「真」ではないと認識されていたからである。湛山の文化論は、「真」という観点から「創造」の重要性を説いた点に特徴が存した。なお、「国民的使命観」と「道徳的使命観」との関わりでいえば、前者は世界に向けて日本の文化的寄与を

要求する契機となり、後者はその寄与が独善的なものになる可能性はないかという「自己内省」の契機になっていた。

第3章では、「天皇制」論を検討する。湛山は1910年代から国民主権論を唱えた。しかしその一方、天皇・皇室は独自の「存在意義」を持つと認識し、その存在を戦前期から戦後期にかけて一貫して肯定してきた。けれどもこうした態度は、帝国憲法下の《「支配様式」としての「天皇制」》の肯定には直結しない。事実、彼はその意味での「天皇制」に対して、終始批判的態度を堅持し続けた。湛山の「天皇制」をめぐる言説は、思考方法から見ると「欲望統整」哲学と「真」を追求する思考によって導き出されたことが明らかである。前者は、国家（社会）における「調和統一（＝一元化）」の作用が重要であるとの認識から、天皇や皇室にその機能を期待したと考えられる。後者は、湛山が天皇と皇室の双方に存在意義を見出しており、それを果たす限りにおいて、両者の存在を内に含んだ日本の政治制度や社会秩序を「真」と見なした。それ故、天皇・皇室の存在意義の発揮を妨げる要因が存在する場合、それに対して手厳しい批判を加えてきた。《「支配様式」としての「天皇制」》のあり方に疑問を投げ続けてきたことが、まさにそれを裏付けている。

第4章では、戦前期及び戦時期の対外論を検討する。先行研究において対外論は「小日本主義」の枠組みによって検討されてきたが、対外論の変化について十分な説明はされていない。本研究では、思考方法の観点から対外論を読み解くことで、その変化の原因を解明した。明らかとなったのは、湛山の対外論の変化が思考方法の構成要素が内包していた問題に端を発していたことである。例えば「日本」的視角に根差した思考の問題性は、そこに「ナショナルな視点」が組み込まれていたことである。このことは、彼がその視点とは無関係に対外論を展開できなかったことを意味している。1930年代以降になると、日本を取り巻く「境遇」の変化に引きずられる形で、ナショナルな視点が強調された対外論が見られるようになった。しかし湛山には、ナショナルな枠組みを相対化する契機（生活空間としての「日本」という「根拠地」や「道徳的使命観」）が存在していたことから、この時期の対外論が全てそうした内容のものではなかった。

第5章では、戦後期の対外論を検討する。「対米自主独立」の態度や「日中米ソ平和同盟」構想に帰結する湛山の「自主外交」の主張からも明らかのように、保守政党に在籍しながらも、その行動や言説が党内では「異端」であった事実を鑑みると、政治家という立場にもかかわらず、それに伴う「制約」から逃れていたようである。湛山の外交に関する言説は、政治家時代にも以前と変わることなく、あくまで彼自身の思考方法と強く結び付いて導き出されていたことから、言論人と政治家という立場の違いによる対外論の「断層」が生じることはなかった。

以上の検討を通して、湛山の政治思想の特徴が明らかとなった。それは先行研究において「急進的」性格を持つものとして理解されてきた彼のリベリズムが、実際には漸進的性格を持っていたことである。また一方で「急進」、他方で「反動」を排したのも彼のリベリズムの特徴であった。その意味で、それはまさに「平衡」を追求する思想であったといえよう。湛山のリベリズムが反動と急進という両極端を排したのは、そもそも彼の思考が生活空間としての「日本」という「根拠地」に根差していたことによる。これによって思想が抽象的、観念論的なものではなく、常に具体的な問題や課題と関わりを持ち、また常に「現実」（＝「境遇」）と向き合い続けることを可能にした。このことは、彼が「現実」を無視して「理想」を語る事がなかったことを裏付けている。実際に湛山は、「個人—日本人—人類」のあるべき方向性として「理想」を持ち、その実現のために個別の目的を設定した。その場合、あくまで理想の実現に向けて生活上の変化は緩やかなもの、つまり着実に漸進していく態度が不可欠であるとした。

短期的に見れば、確かに湛山は「揺らぎ」や「動揺」を見せた。しかし長期的に見ると、彼は決して挫折することなく「真」を追求し続けたといえよう。また湛山の「真」が、彼の思考に内在していた「合理—非合理」的要素の相互の緊張関係を維持しながら導き出される以上、その本質は決して「急進的」ではなく「漸進的」であった。このような漸進性という点に湛山の思想の

本質を見出すことができるが、同時に見逃せないのは、そこに「保守」の契機も存在していたことである。保守は湛山の思想において漸進と両輪を成していたと考えるが、ここでの保守とは、湛山の言葉を借りれば「確信のある保守」という意味である。あらゆる物事を連続性の上に捉えて、過去と完全に断絶した現在・未来はないという「確信」を抱き、次々と生じる「新しい経験」は「過去の経験」と調和する必要があると考える。それ故、一切の過去を排斥する見方、つまり「過去の経験」からあたかも人間は自由になることが可能であり、それを「進歩」とする見方（＝「卑屈な進歩」）には否定的となる。しかし、過去を無批判的に賛美して一切の変化を排除するものではない。既存の秩序に何らかの欠陥が存在する場合には、それを漸進的に改善していくことを受け入れるからである。こうした意味での保守及び漸進が、リベラリズムを含む湛山の思想体系を特徴付けていた。

石橋湛山の思想は、生活空間たる「日本」という「根拠地」に立脚しながらも硬直的ではなかった。柔軟性、弾力性を持ちながら、理想や目的を達するために「現実」と向き合い続け、そして「真」を追求してきた。しかし一定不変の「真」を想定できない以上、常にある時点で最も有効性を持つ「生活の方法」を模索しなければならず、それには「強靱な主体的精神」が不可欠であった点で多大な困難を伴った。しかしこうした困難さを伴う営為を、湛山は言論人としても、政治家としても継続してきた。混迷の続く現代において、石橋湛山の思想と行動は、未だ示唆を与え続けるものである。